

こども家庭科学研究費補助金
(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業)

分担研究報告書

分担研究課題名

妊産婦健康診査で一般妊婦に対して行われる各種検査についてのエビデンス収集

研究分担者

関沢明彦・昭和大学医学部産婦人科学講座・教授
板倉 敦夫・順天堂大学・大学院医学研究科・教授
鈴木 俊治・日本医科大学・女性生殖発達病態学・大学院教授
永松 健・国際医療福祉大学医学部産婦人科学講座・教授
横山 良仁・弘前大学・大学院医学研究科産科婦人科学講座・教授
田丸 俊輔・埼玉医科大学・医学部産婦人科学講座・准教授
目時 弘仁・東北医科薬科大学・医学部衛生学・公衆衛生学教室・教授
中西 秀彦・北里大学・医学部附属新世紀医療開発センター・教授
川端 伊久乃・日本医科大学・女性診療科・産科・准教授
菊地 紗耶・東北大学大学院医学系研究科精神神経学分野・准教授
増澤 祐子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授
千草 義継・京都大学大学院医学研究科・器官外科学講座 婦人科学産科学分野・講師
末光 徳匡・東京慈恵会医科大学・産婦人科学講座・助教
熊谷 麻子・順天堂大学・医学部産婦人科学講座・助教
小出馨子・昭和大学医学部産婦人科学講座・講師
向井 勇貴・昭和大学医学部産婦人科学講座・助教
牧野弘毅・昭和大学医学部産婦人科学講座・助教

研究要旨：

妊娠中に行う検査 23 項目、妊娠中に実際に行われることのある検査 12 項目、産後に行う検査 7 項目の合計 42 項目について総説論文を完成させた。作成にあたっては、産婦人科診療ガイドライン 2023 および来年度発刊予定の 2026 年度版の原案の記載内容を確認し、その差異を踏まえた記載を行った。

A.研究目的

少子化の急速な進行に伴って産科診療の集約化・重点化の必要性が高まってきている。また、妊産婦の高年齢化に伴ってハイリスク妊産婦が増加している。このように妊産婦を取り巻く環境が大きく変化していることから、エビデンスに基づいて妊産婦健康診査の内容を再検討する必要がある。また、妊産婦の負担を軽減するためにデジタルデバイスの活用についても検討する必要がある。

そこで、本研究では、妊産婦健康診査において実際に行われることのある検査項目について最新のエビデンスをもとに文献的に再評価するとともに、本邦においての重要性も加味して、エビデンスに裏付けされた妊産婦健康診査の在り方について検査項目ごとに総説論文を執筆するとともに、そのエビデンスが「産婦人科診療ガイドライン産科編 2026」に反映されるように、各総説論文と産婦人科診療ガイドライン 2023 および来年度発刊予定の 2026 年度版の原案の記載の差異を確認しつつ、研究に取り組んだ。この研究によって、妊産婦健康診査を含めた周産期医療の安全性が高まるとともに、質的な向上にもつながるものと考えている。

B.研究方法

2024 年度に妊産婦の健康診査で行う各種検査として妊娠中に行う検査 23 項目、妊娠中に実際に行われることのある検査 12 項目、産後に行う検査 7 項目（表）について、各項目について最新のエビデンスを文献検索して抽出して確認したうえで、その結果を踏まえて各検査項目について総説論文を執筆する。この論文では、各検査について検査時期・頻度、検査の目的、検査の意義・必要性、検査の重要度、検査異常時の対応についての項目を箇条書きで記載し、その上で各事項について文献的考察を踏まえた、また、報告のあるエビデンスを紹介しながら解説する形式で記載する。各研究分担者が各項目を担当し、執筆を行った上で、各項目の副担当者が校閲し、一次原稿を完成させる。その後、研究分担者の板倉敦夫先生と鈴木俊治先生が全論文をレビューし、そこで出された疑問点について、執筆者に戻して修正を確認し、その後、最終の研究班全体でのレビューを行って、修正第 3 版を作成した。

修正第 3 版の作成にあたっては、産婦人科診療ガイドライン 2023 および来年度発刊予定の 2026 年度版の原案の記載内容との差異を確認しつつ、そのことに配慮した記載を行った。

＊（表）総説論文を作成する項目

「望ましい基準」に記載の検査		実際に妊婦健診で行われることのある他の検査	産後の健診で行われる検査(産後に行う検査・対応)
妊婦健康診査の頻度（間隔：単胎・多胎）	HIV 抗体検査	トキソプラズマ抗体	血圧
胎児心拍確認	梅毒血清反応検査	CMV 抗体検査	蛋白尿定性 蛋白/クレアチニン比
腹囲・子宮底	風疹ウイルス抗体検査	甲状腺機能 (TSH, f T3,fT4)	体重
血圧	血糖検査	HbA1c（初期）	産後の超音波検査
浮腫	血算検査	5 0 g GCT	メンタルヘルス評価
尿（糖および蛋白）	HTLV-1 抗体検査	腔培養検査	産後の血糖管理
体重	子宮頸がん検査（細胞診）	フェリチン	乳房ケア
保健指導	超音波検査	妊娠初期妊娠高血圧腎症 スクリーニング	
血液型（ABO,Rh）	性器クラミジア検査	血清 sFlt-1/PIGF 比	
不規則抗体	B 群溶血性レンサ球菌 (GBS) 検査	家庭血圧	
B 型肝炎抗原検査	子宮頸管長	NST	
C 型肝炎抗体検査		NIPT	

（倫理面への配慮）

本調査は、最新の文献調査を行ってその結果を踏まえて各検査の目的や意義、検査で陽性となった場合の対応などをまとめる研究であり、倫理的な課題は発生しない。

C.研究結果

参考資料 1 ～3 のように、妊娠中に行う検査 23 項目（参考資料 1）、妊娠中に実際に行われることのある検査 12 項目（参考資料 2）、産後に行う検査 7 項目（参考資料 3）の合計 42 項目について総説論文を完成させた。

さらに、ガイドラインの記載内容との差異を確認すること、検査の実施にあたって議論の必要な項目を抽出することで今後の検討課題を抽出しており、令和 7 年度にはこの資料に基づいて課題を整理し、産婦人科診療ガイドライン産科編 2026 の作成委員会とも連携して、課題をガイドラインに反映させるなどの活動に活用する。

D.考察

妊婦健診ではさまざまな検査が行われている。今回、妊娠中に行う検査 23 項目、妊娠中に実際に行われることのある検査 12 項目、産後に行う検査 7 項目の合計 42 項目について最新のエビデンスに基づいて各検査項目についての再評価を行った。その中で、今後も引き続き妊産婦健

診での実施の重要性をレベルごとに分類して表示した。

今後、このデータをもとに妊婦健診に関連する「産婦人科診療ガイドライン産科編 2026」の発行に向けた準備の中で、新たなエビデンスについて盛り込むことなどの提案が必要になるが、そのための基礎資料が整ったものとする。また、今後、研究班として、検査における課題を整理して、その課題解決に向けた取り組みを行うためのデータ整理は完了しており、次年度に向けた取り組みにつなげていきたい。

E. 結論

妊産婦健診で行われている合計 42 項目の検査について最新のエビデンスに基づいて各検査項目についての再評価を行ったうえで、総説論文としてまとめた。さらに、各検査における課題を整理して、その課題解決に向けた取り組みを行うための基礎資料も完成させた。これらの資料を次年度に向けた取り組みにつなげていきたい。

F. 健康危険情報 なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

3. 講演会・シンポジウム

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし